

# 特集にあたって

佐藤 幸人

●特集のねらい

二〇一六年、台湾では三度目の政権交代が実現した。一月十六日の総統選挙において、民主進歩党（以下、民進党）の蔡英文候補が中国国民党（以下、国民党）の朱立倫候補に三〇〇万票以上の差をつけて圧勝した（表1）。表2に示すように、同日に行われた立法委員選挙でも、民進党は立法院の過半数の議席を獲得した（立法院

表1 総統選挙の結果

	蔡英文	朱立倫	宋楚瑜
得票数	6,894,744	3,813,365	1,576,861
得票率 (%)	56.1	31.0	12.8

(出所)『聯合報』2016年1月17日。

表2 立法委員選挙の結果

	民進党	国民党	時代力量	親民党	その他
得票率 (%)					
選挙区・原住民族	44.6	38.9	2.9	1.3	12.4
全国区	44.1	26.9	6.1	6.5	16.4
議席数	68	35	5	3	2
選挙区・原住民族	50	24	3	0	2
全国区	18	11	2	3	0

(出所)表1と同じ。

は国会、立法委員は国会議員)。民進党はこうして「完全執政」を達成した。蔡は五月二〇日に第一四代中華民国総統に就任し、新政权がスタートした。行政院長（行政院は内閣、行政院長は首相）には林全を任命した。

この特集のねらいは、蔡政権が誕生した背景、および蔡政権の課題とそれに対する取り組みを考察することである。特集は一二の論考から構成されている。まず、松本は香、竹内孝之、川上桃子が異なる角度から、台湾と中国の関係やそれを取り巻く国際関係について検討している。続いて竹内と顧瑩華がそれぞれ日本との関係と地域経済統合への参加について論じている。次に内政に議論を移し、川上が産業政策・科学技術政策を、寺尾忠能が原発およびエネルギー政策を、林成蔚が社会福祉政策を

取り上げて議論している。

一月の選挙の結果によって、台湾政治の制度や構造にも大きな変化が生じるとみられている。この特集では松本充豊が国会改革を、小笠原欣幸が国民党の今後を考察し、展望している。新しく生まれた時代力量については徐永明立法委員が自ら語っている。さらに、今回の政権交代を大きく後押ししたひまわり運動について、それに参加した周馥儀と対話を行い、それを特集の最後に収めている。

このイントロダクションの残りの部分では、民主化の始動から蔡政権成立に至るまでの過程を振り返り、特集のバックグラウンドを提供する。また、台湾に特有の事項について簡単な説明を加え、台湾に関する詳しい予備知識を持たない読者にも、各論考をスムーズに読めるようにしたい。

●民主化と一度目の政権交代

長く国民党の権威主義体制下にあった台湾で、目にみえる形で民主化が動き出すのは一九八〇年代後半からである。一九八六年に民進党が結成され、翌八七年に戒嚴令が解除された。

一九九二年には、一九四九年以降、部分的にしか改選されていなかった立法院が全面改選された。一九九六年には初めて総統の直接選挙が行われ、李登輝が当選した。一九九〇年代には台湾と中国の関係（兩岸関係）も大きく変わった。台湾は長らく中国との一切の交流を拒んできたが、一九九〇年代に入ると、台湾では海峡交流基金会（海基会）を、中国では兩岸海峽協会（海協会）を、窓口となる準民間機関として設置し、台湾と中国の政府間の間接的な交流が始まった。

二〇〇〇年の総統選挙では民進党の陳水扁が、国民党の連戦と国民党を離れて立候補した宋楚瑜を破って当選し、初の政権交代を実現した。陳は二〇〇四年の総統選挙でも再選を果たすが、八年の任期の間、民進党は立法院において一度も過半数の議席を獲得することとはなく、「完全執政」を実現で

きなかった。そのため、法案や予算案を思いどおりに通すことができず、国民党資産の処理など、移行期正義に関わる問題も残された。

陳政権成立以降、民進党など台湾に強いアイデンティティーを持つ政治勢力は緑と呼ばれ、一方、国民党を中心とする、中華民国へのアイデンティティーが強く、中国に親和的な政治勢力は青（中国語では「藍」と呼ばれ、両者は激しく対立するようになった。特に台湾独立を積極的に主張するグループは深い緑（深緑）、中国の統一を志向するグループは深い青（深藍）と呼ばれる。

緑と青の対立にはエスニック的な側面もある。現代の台湾社会は四大エスニックグループ（族群）から構成されると考えられている。まず、漢人と漢人移住以前から台湾に住む「原住民」に分かれる。漢人は戦前から台湾に住む人とその子孫（本省人）と、戦後に中国大陸から移住した人とその子孫（外省人）に分かれ、本省人は福佬系と客家系に分かれる。緑の主たる支持者は、人口の多数を占める福佬系本省人である（ただし、福佬系本省人のなかにも青の支持者は一定数いる）。外省人の多く

は青に属し、緑の支持者は少ない。原住民と客家も青の支持者が多い。

陳政権は第二期になると、スキヤンダルが次々と明るみに出て、人々の厳しい批判に晒された。二〇〇六年九月には、赤シャツ隊（紅衫軍）と呼ばれる、陳の辞任を求める運動が盛り上がり、群衆が総統府前の凱達格蘭大道に押し寄せた。

陳政権は二〇〇〇年の発足当初、李政権末期に悪化した中国との関係の改善を試みたが、中国は陳政権を相手にしようとしなかった。

陳が再選を果たすと、中国は「一九九二年コンセンサス」（詳しくは松本はる香稿および竹内稿を参照）を認め、国民党との接近を図った。一方、スキヤンダルで追い詰められるなか、陳政権は独立傾向を強めていった。その結果、陳政権は中国だけではなく、アメリカとの関係も悪化させてしまうことになった。

### ●馬英九政権の八年と二度目の政権交代

こうして陳政権は行き詰まり、二〇〇八年の総統選挙では国民党候補の馬英九が大差で民進党の謝長廷候補を破り、二度目の政権交代

が実現した。国民党は立法委員選挙でも圧勝した。

馬政権は九二年コンセンサスに基づきながら、中国との関係の改善を進めた。その結果、台湾と中国の間は直行便で結ばれ、多くの中国人観光客が台湾を訪れるようになった。二〇一〇年にはECFA（経済協力枠組み協定）が締結されている。

馬は二〇一二年の総統選挙でも蔡を破って再選を果たした。立法院でも国民党は過半数を維持した。しかしながら、第二期に入ると、馬政権の中国への接近に対する人々の警戒が高まっていった。また、多くの人にとって、中国との関係改善の経済的な効果が顕著ではなかったことも失望を招いた。特に若者は経済的な境遇に強い不満を持つようになった。

さらに、馬政権は政策の遂行において、強硬な姿勢で臨むことが多く、それが反発を呼んだ。党勢が一時衰えた民進党に代わって、社会運動が活発になり、馬政権のこのような姿勢を牽制した。二〇〇八年の陳雲林海協會会長の訪台時の取り締まりに異を唱えた野イチゴ運動（野草莓運動）、国光石油化学コンビナート建設に対する

反対運動、親中メディアによる独占に反対する運動、苗栗県大埔での農地収用に対する反対運動、軍でのいじめによって洪仲丘が死亡したことへの抗議活動等々が展開された。

二〇一三年、馬政権が中国とサービス貿易協定（服貿）を締結すると、その立法院での審議を監視する運動が組織され、翌二〇一四年三月には立法院を占拠するに至った。この運動は「ひまわり（学生）運動」（太陽花（学生）運動）と呼ばれるようになった。これは馬政権と国民党に対して決定的な打撃を与えた。国民党は同年一月の統一地方選挙で大敗し、二〇一六年には政権を失うことになったのである。

この特集で検討している蔡政権および台湾政治の諸課題は、このような過程のなかから生まれ、その解決には克服しなければならぬ多くの困難が待ちかまえている。この特集ではそのことを明らかにし、蔡政権と台湾の人々の今後の取り組みをみつめる着眼点を提供したいと考えている。

（さとう ゆきひと／アジア経済研究所 新領域研究センター）